

# 第6回 小中一貫教育懇話会

## 議事録 要旨

- 1 開催日時 平成 25 年 7 月 25 日(木) 19:00～21:10
- 2 開催場所 生駒北小学校多目的室
- 3 参加者 小柳和喜雄（奈良教育大学教職大学院教授）、中谷辰幸（生駒北小学校育友会長）  
影林保志（生駒北中学校育友会顧問）、正田文敏（打田・高船保護者代表）  
井上園子（「i どばた会議」共同幹事）、藤堂宏子（ひかりが丘自治会会長）  
窪田博明（久保自治会顧問）、十文字良明（生駒北小学校長）  
本田善藤（生駒北中学校長）、柳田富恵（生駒市校園長会長）  
富山二郎（生駒北小学校教諭）、政岡俊伸（生駒北中学校教諭）
- 4 開会あいさつ （峯島部長）
- 5 質疑応答
  - 座長 : 大原学院視察の様子について参加者に報告していただく。
  - 事務局 : 参加者 14 名、京都国際会館からバスで 20～30 分のところにある。創立は生駒北小とほぼ同じだが、小中学校合わせて児童生徒数 85 名、児童生徒数の減少で一時廃校が具体化したのが、地域住民の力で小中一貫校として存続させた。校舎は元々隣接しており、既存の施設をそのまま使っているため、小中一貫教育の中身に絞って視察できた。1～4 年生を前期ブロック、5～7 年生を中期ブロック、8・9 年生を後期ブロックとする 4・3・2 制。中期ブロックから制服を着用し、後期ブロックではネクタイやリボンをつけるなど意図的に段差をつけている。9 年間で 3 回リーダーになる機会があり、しっかりとした経験を積んで卒業すると説明があった。運動会の応援団長は 6 年生、生徒手帳の交付式は 7 年生の始めと 6・3 制の枠組みが残っているところもあった。地域の声に基づいて設立が決まった小中一貫校なので、学校運営にも着実に地域の声が生かされているのが印象的だった。たとえば地域の要望にもとづいて学校内に保育所も設置されていたし、学校運営協議会も設置されていた。
  - 参加者 : 4・3・2 制とコミュニティースクールを特色として学校運営をしている。調整区域で、高山地区の環境と似ており、また、一貫校設立 5 年で成果を検証しようとしているなど、非常に参考になった。
  - 参加者 : 英語の教師を地域の基金で雇うなど、その地域力に感銘を受けた。子どもたちは 9 年生で卒業論文として地域への提言をまとめ、発表している。地域と密着した学校だと感じた。子どもたちは自

主的に時計を見て動いており、チャイムが鳴らないことに心配はないと思った。また、子どもたちは各ブロックのリーダーとして非常に良い形で育っていることも感じられた。

参加者：先生方が自信を持って教育に当たられている。英語の先生を加配し、児童数が少ないのに必ずT1・T2の二人で授業をしていたのもすばらしいと感じた。

参加者：授業はいい感じで行われていた。英語教育に力を入れていて、廊下には自然と英語に親しめるような環境づくりをされていた。英会話学習では少人数で先生と生徒が会話のキャッチボールをしていた。うまく運営されていたが、1クラス14人ほどなので、大原と同じことが北小中学校でできるのかどうかは分からない。施設は古いままだったのであまり参考にならなかった。

参加者：地域が学校を残すために立ち上がったということですごいパワーを感じた。小さい子どものために学校を開放していたのも印象に残っている。私自身子どもを産んだとき近所に子どもがいないのが不安だったので、この取組はいいなと思った。中学生は大人っぽい感じがする。しっかり育っている、育ててもらっているということを感じた。

参加者：テニス部は府大会で3位。全校生徒85人の学校でこのような成績を残せるのはすごい。よい指導者と練習が部活を盛んにしていく方法。5・6年生から基礎的スキルを教えてもらい、中学校でも続けていくから強くなる。本当にすごいと感じた。

参加者：地域の熱意を感じた。つながりを大切にされていて、「5年生9年生対決」として分配法則の授業を違った学年が一緒に受けていた。面白い授業だ。小学生の自由な発想が面白いと先生は言っていた。保育室の子どもたちがとてもかわいい。あのようなかわいい子どもたちが身近にいたら、小中学生はきっとほのぼのとした気分になるだろう。このように大事に育てられてきたんだと思うだろう。0歳から3歳までの子どもの子育ての相談ができる「ピーチク・パーチク」という施設があることを知り、本当に0歳から9年生までだなあと思った。4年生、7年生、9年生と学校でリーダー性を発揮できる時をうまく作っている。9年生が全体のリーダーで、その成果がすごい。大人と同じ感覚で年下の子どもを見ている。高校を途中で辞める子がないのは、この経験が本当に役に立っているからだという説明があった。

参加者：チャイムに依存しない生活と4・3・2制を生かした学校づくりをしている。制服等ではじめや段差をつけるようだが、うちの校区でその4・3・2制が取れるかを考えると若干心配だ。地域の特性が似ているところもあるし、違うところもある。この地域にそのまま取り入れることが難しいこともあると思う。

事務局：小中一貫校をスムーズにスタートさせるために、まず6・3制でスタートさせ、その後軌道に乗ってから様々な工夫をすることになると考えている。

参加者：教頭から報告を受けた。中学校教員が小学校教員と連携しており、経験のあるベテラン教師がたくさんいて、自信を持ってやっているとのことだった。中学校教員の年齢はどんな構成だったのか。中堅の教員が少ないとよく言われるが、バランスはどうだったのか。

事務局：若い方もベテランもいた。京都は奈良と人事の進め方が違う。また、小中一貫教育を全市的に進めている。小中一貫教育にする際には、市教委としてバランスのいい教員配置を進めたい。

参加者：修学旅行や部活のバス借り上げ代金を行政からではなく地域から出しているらしいが、なぜ行政は出さないのか。また、なぜ養護教諭が一人なのか。

事務局 : 地域がバス代を負担しているのは、この地の特別な事情があるためであろう。生駒市では小中一貫校にしても、養護教諭は定数法通り、小中別に配置する。

参加者 : 地域が基金を設けていると聞いた。ここにコミュニティースクールのあるべき姿を見ることができると。

参加者 : 地域の自治会が教育に及ぼす力・発言力は大きいと聞いた。これは京都市の特性である。従来から学校教育に対して地域が発言力もお金も持っていたようだ。

座長 : 大原学院の視察では得るものが多かったように思われる。全国的にまれなのは0歳児からの保育や、地域の子育て支援にも取り組んでいて、コミュニティーセンター的機能も果たしていることだ。学校が街の中核を担っているので、9年生が卒業を前に今までの集大成として発表する大原提言は、自分たちが街づくりの一端を担っていて、自分たちができることは何だろうということを考えさせるものだ。これはここ生駒北中学校区での地域学習とも接点がある。0歳児からの保育室が学校の真ん中にあっただが、あの部屋を学校のどこに置くのかでは随分議論があったようだ。小さい子どもが泣いたら勉強できないというのは大人の論理。家庭でも勉強部屋にこもらずに母親のいるところで勉強していることは多い。子どもたちはいろんな人とかかわり合いながらルールを作る。大人の論理で小さな子どもとの関わりを断つのは良くない。大人の論理で問題が起こるだろうと考えてセパレートしようとするが、それがかえって関係を断ち切っていくことになるので、その点は生駒北小中学校でよく考えていかなければならない。

生駒北小中一貫教育のイメージがまとめられて1枚の紙で出た。前回提示したものについては、目指すものは分かるが内容が多すぎるのではないかと、とか、優先順位を、という話があった。どれを優先順位として高くとらえるかと、ここにはないもので加えるといいものとか、それぞれの思いを語ってほしい。

参加者 : 手直しして出来上がったものは最終的に市民に配布されるのか？それとも懇話会の資料だけで終わるのか？

座長 : イメージがまだぼんやりしているので、方向性をクリアにしていけないと話しぶらいたという声が大きかった。だから、皆さんが聞いている意見を出し合い、イメージを整理していこうということだった。これを配るかどうかは意思決定していない。ここで小中一貫教育をするならば、何を大切にしていけるのかを懇話会の中で形にしていくが、これをもって、「小中一貫教育はこれでいくぞ」という権限は懇話会にはない。

参加者 : イメージで示されたことは、一貫校でなくてもできることが大半を占めている。現場の教師として困惑することもある。体力向上のため小中学校が連携するということだが、生駒北中学校ではすべての教科に専門家を配置できない。体育の教師は技術も教えている。3学年分の教材研究をし、3学年分のテストを2教科分作らなければならない、その上、小学校に教えに行くのは無理だと思う。よく、持ち時間数のことだけで議論されるが、クラス数が少ないので担当時間数は確かに少ない。しかし3学年を教えるので3学年分の教材研究と3学年分のテスト作りで、大規模校に勤務する先生に比べ、生駒北中の先生は仕事量が3倍である。中学校の先生は半分ほど時間が空いているじゃないと言われるが、小学校に空き時間に教えに行くというのは実態からかけ離れたことだ。部活動についても競技経験のある教師が少ない。また、小学校と中学校とでは子どもの身体能力にかな

り差があり、簡単にはいかない問題がいっぱいある。

参加者： 体力、運動能力の向上というところは部活動の活性化と変えていただきたい。中学3年生と小学生が全く一緒に活動するのは無理だ。そうではなく、活動時間の始めに基礎的なことを教えてもらうことで、中学校に進学した時にそれが有用に働く。競技経験のある指導者が必要なのは私も分かる。小学校には学生時代に競技経験のある教師は多い。中学校の先生だけで考えるとそういった問題も起こるが、小中全体で考えないといけないと思う。また、サッカー一部なら11人必要だが、剣道部なら2人いればできる。部活動の設置について、そういう考え方も必要ではないか。生駒北小中学校では「この部活動がすごい」というものを作ったらいい。

参加者： 小中の連携や協力がそれほど現場の教師にとって大変なのか。それほど大変ならなぜ大原学院はできるのか。物理的に不可能なら人員配置はどうしていたのか不思議だ。確かに大変だが先生方は協力してやっていると校長は言っていた。京都府や大原学院はどのように工夫していたのか。

事務局： 都道府県の条例で教員配置は決められている。京都と奈良は同じではないが、全体の定数は国の基準で決められているので大きな差はない。大原学院には非常勤の講師が配置されていたが、生駒北中にも現在、非常勤講師を入れている。条件は同じだ。スタートは現状からで、安定したら教職員はできるところからお互いに協力できるようになる。また、同じ職員室にいても情報を共有し合い、効果的教育活動ができる。

参加者： スポーツの指導者は、先生方だけではなくて、卒業生など地域の方でサポートしてくれる人もいる。力を貸してくれる人を活用すれば先生方の負担を減らし、子どもたちのためにもなる。

参加者： 3つの学年を教え、2教科を担当するのは教師にとって負担かもしれない。しかし自分はいろんな規模の学校に勤務したり見てきたりしてきた。大規模校に比べてテストの採点時間は短い。負担は工夫で解消できる。部活動では小学校と中学校で違いがあるので、それなりの棲み分けはしていかなければならないと思う。

参加者： 新しい学校文化を創るということで今まで懇話会を行ってきた。このイメージ図をたたき台にして前向きに考えなければ話し合いは進まないと思う。

参加者： 私は一貫校を作ることには賛成できないという考えで懇話会に参加している。一貫校を作ることについては市長からトップダウンで降りてきて、教育委員会で十分な論議をしていないことに間違いがある。これは民主主義の考え方に反する。市民に降りてくるまでの手続きが間違っている。手続き論で済ませてもらいたくない。問題点は人口減を食い止めることと学力向上ではないか。一貫校になっても人口減は食い止められないと市長は言っている。つまり、小中一貫校の設立だけでは社会問題は解決できないのである。学力向上は人の力、教員の数を増やすことで解決できる。制度の問題でできないことも分かっているが、教員の数を増やしてもらいたい。

参加者： このまま変わらないで小中が存続することに賛成しない人がたくさんいる。地域の人で先生方に厳しい見方をしている人もいるということを知ってほしい。小中一貫校になることでやる気のある先生に来てもらい、小中一貫を手段として子どもたちに良い教育をしてもらいたい。今のままでは地域として危機感を持っている。地域も教師も一緒になっていい子どもを育てていく契機になればよい。トップダウンであってもいいことであるなら進めたい。今まで地域は市にいろいろな要望を出してきたが、それで動かなかったところがちょっとでも動くのであれば、先生方にも地域にもい

ろいろ不満はあるだろうけれどもジャンプしたい。

座長 : 懇話会の参加者は各団体の代表者である。出席者はその団体の声を背負って語らなくては行けない。先ほどの発言は生駒北中の先生の意見を代表していると考えてよいのか。

参加者 : 個人的な感想や考えを述べているのではない。職員の中ではおおむね私が申し上げた理解の中にあると考えてもらってよい。

参加者 : 職員にイメージ図を配布し、意見があれば私の方に言ってほしいと言ったが、職員のそのような声は届いていない。

座長 : 懇話会の話し合いの様子は各団体に伝わっているのか。懇話会の様子が伝わらないまま、賛成か反対かアンケートを取ってしまうと、いろんなバイアスがかかる。私は懇話会で小中一貫教育に取り組んだ学校の成功事例もうまくいかなかった事例も話してきた。学校でも実際にやれることや起こりうる問題について、いろいろ聞き取ったうえで学校全体としてこういう問題があったと伝えていただきたい。それをみんなに伝えるのがこの懇話会だ。

参加者 : 私は保護者代表なので、その立場から意見を言いたい。一貫校のイメージについて、今の体制でもできるのではないかという話だったが、今の体制でできるなら既にできていたはずだ。一貫校を手段とすることで、一貫校のイメージが実現していくことを期待する。一保護者として教育の内容を充実してもらえぬのならありがたい。「i どばた会議」では保護者がざっくばらんに本音を語ってくれるようになっている。保護者には7月にアンケートを取り意見を募った。3月に比べると小中一貫校に対する理解度は高まっている。しかし、市の説明を十分と思っていない保護者はまだまだ多い。不安や疑問を抱いている保護者も多い。前回のアンケートに比べて消極的な意見は少なくなったものの、切実な思いや不安をわれわれは聞いている。われわれは市に保護者の不安や疑問を伝え、市はできないこともあるかもしれないが、それらの不安や疑問をなくしていくことで、子どもたちにとってよりよいものができあがっていけばと思う。

参加者 : イメージ図を見て、これらは今まででもやってもらえることだったのではないかと思う。9年間1つのクラスで1つの枠にはめられることが不安である。だから中学校を上中という話も出てきた。小学校に一貫校を作るとなると運動場が狭く、野球部の活動が無理ではないか。3学年2教科の教材研究は先生がしんどい。6・3制で定員を35人にするなど教員配置を特化してもらえないのか。地域学習の取り組みやタブレットの導入、6・3制を採りながら3年生から英語学習を行うことなど本当にできるのか。部活動で外部講師を雇わなかったのはなぜか。年1回の先端大との連携授業では理数教育推進にはならないのではないか。一貫校でなくてもできることが多いように感じる。

参加者 : すごくたくさんの人から話を聞いている。今の学校に満足してないというのが現状だ。学力面では塾に通わなくてもいいようにしてほしいし、人間関係の広がり、つまり人間力を伸ばすことを親は求めている。人間力とはコミュニケーション力やプレゼンテーション力であろうか。これらは集団の中でしか伸ばせない。先生に任すしかない。親はいろいろなことを学校に望んでいる。そう考えると小中一貫校は今を変えるチャンスではないのかと思う。イメージに望むことはいろいろあるが、人間関係をしっかり築ける力をつけさせてほしいのと基本的な学力を上げてもらうことを保護者は望んでいる。保護者は先生をバックアップして盛り上がっていききたい。先生の負担が増えると

いうわさがある。そうだったら先生は子どもの人間関係のことなど見てくれないのではないかと心配だが、大原を視察して地域や保護者が自ら汗をかいていることに感動した。子どもも大人も汗をかいていいものを作りたい。保護者をまとめるには強力なリーダーシップが必要であり、それを小柳先生にお願いしたい。

座長 : イメージ図を見て小中一貫校になってできることと今の体制でもできることとに分類したい。

参加者 : 人の問題が解決できるなら部活動は今の体制でできる。

座長 : 地域学習は9年間を通して行うなら6・3と分かれるより小中一貫で行う方がいい。そういう基準で考えるなら、その他のところはどうなるか？

参加者 : 学力補充はどちらでもできるが、先生方が連携し、足りなかった学力を中学校で補うなど、小中一貫になった方がパワーアップできる。

参加者 : 人間関係の広がり、小学校入学からの履歴が残っているので、9年間を通して子どもを見ていく方がよい。

参加者 : 理数教育と情報教育と国際理解については、人の配置さえあれば小中一貫校でなくでもできる。

参加者 : 理数教育推進は指導の仕方や指導効果は小中一貫のほうが上がる。

参加者 : 予算、人、交通インフラ、土地など地域振興の総合的な施策の中に一貫校があるならば賛成できる部分はたくさんある。

座長 : 始めから予算があって、これでやりなさい、ということではなくて、やりたいことがあってそこに予算がつくという段取りではないかと思う。今の体制でもほとんどできるということだが、国際理解教育と英語教育についてはどうか。

参加者 : 国際理解教育と英語教育は今の体制でもできる。しかし、これら2つは分けて考えないといけない。というのも英語専門の教師は小学校にいないので、小学校の英語の授業はまだまだALTに頼っている状態だ。よって、国際理解教育は今の体制でもできるが、英語教育は一貫校で効果が上がる。人間の基本的な資質を磨くプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の向上は今の体制でもしなければいけないことである。

座長 : 部活動は今の体制では難しいとのことだったので一貫校で効果を上げる方になると思われる。キャリア教育はどうか。

参加者 : 現状でも十分取り組んでいる。

座長 : キャリア教育の4つの要素8観点の中で、今の話はワークキャリアにあたると思うが、ライフキャリアの面から言うとどうか。

参加者 : その面からいうと一貫校の方が効果が上がる。

座長 : 現スタッフの負担増になるのは何か

参加者 : 部活動だ。物理的には英語教育は負担増だが、人によると思う。勉強になると言う人もいる。数学の教師は小学校の教科書を見て「すごく興味深い」と言っていた。

参加者 : 小学校と中学校の文化は違う。それをすり合わせるための話し合いは負担増だ。テストや成績のつけ方について話し合わないといけない。

参加者 : 中学生を指導していると「小学校時代のことが分かっていたら、指導の仕方が違ったのに」と思うことはたくさんある。だから一貫校の方が生活指導は充実する。

- 参加者 : コミュニケーション能力もプレゼンテーション能力も小学校時代から小中連携して育ててもらえたらと思う。中学生が小学生もいる集団に何かを伝えるとか、異学年集団の中でコミュニケーション能力は伸びていくように思う。
- 座長 : 一貫校になってできることがこれだけこのイメージ図に書かれていることが分かる。結論は出ないが子どもたちを育てるために何ができるかをこの図を見て話し合ってもらいたい。スローガンに基づいて優先順位をつけ、3次元的に見ていくといいのではないかと。このようにして考えていくと、生駒北小中の教育の今後を考える際、今のままでよいのか小中一貫がよいのかが見えてくると思う。
- 事務局 : 生駒北中学校に来る予定の普賢寺小学校保護者と市教委の話し合いを持った。そのときの様子を参加者から報告していただく。
- 参加者 : 7月8日に打田の公民館で、打田8名と高船4名の保護者と区長が集まって話を聞いた。生駒市教育委員会の他、京田辺市の教育委員会、普賢寺小学校の校長先生も参加した。やはり不安が先に立っている。1学年に1人ぐらいなので、転校生のような気分で北中に通っている。どうして京田辺市の子どもなのに生駒市に、奈良県に通わなければならないのかという疑問がある。英語教育は3年生から、部活動は5年生からということになると、中1から入った時に取り残された気分になる。特色ある学校づくりをしていくとこちらの子どもが入りにくい。さらに子どもが減り、何年かに1人の入学となつては保護者の連携もなくなる。打田・高船からの子どもが不利にならないようにしてほしい。制度上の歯止めを作っておいてほしい。京田辺にいながら生駒に行かなければならないことの違和感や疎外感があることを理解しておいてほしい。6・3制は守ってほしい。体験入学以外に子どもたちの交流はなかった。今後、お互い学校を訪問し合ったりするなどの交流を保護者は望んでいる。今後、京田辺市と生駒市の教育委員会同士の話し合いに期待したい。自治会の話にも、こちらの地域を加えていただきたい。子どもの数が減って、学校がしんどいということで地域から出ていくという結論になる人がいるのではないかと心配する人もいた。
- 参加者 : 地域のこととして、今の話はよくわかる。北小と北中の子どもたちに、普賢寺小学校から来る子どもたちの思いに気づくことができる人間力を育てることが大切である。小学校同士の交流なども通してその素地を養ってもらいたい。一方、普賢寺小学校から来る子どもたちのため、生駒市の教育が制限されるのはいいことではないと思う。マイナスをプラスに変える方法を考えていただきたい。9年間の地域学習というのは高山だけでなく普賢寺地域のことも考える学習としていただきたい。だ。私の息子は中学1年生から北中に入学したが、周りの子どもたちはみんな温かく受け入れてくれた。普賢寺小学校からの子どもたちも生駒北中学校で仲間として温かく迎えられ、そういう素地のある子どもたちがいる学校だ。

## 6 事務連絡 (事務局)

○イメージ図についての意見があれば、市教委に直接連絡いただきたい。

## 7 閉会あいさつ (峯島部長)